

■ Article

箱庭制作者の主観的体験に対する 系列的理解を中心とした質的研究

楠本和彦

(南山大学人文学部心理人間学科)

要旨

本稿は、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験のデータを基に、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討することを目的とする。

二人の調査参加者の継続的な箱庭制作面接における主観的体験について、調査者が設定したテーマに沿って、系列的理解を実施した。B氏のデータを、「宗教性を中心とした心や生き方の変容」の観点から検討した。この検討は(1)宗教性・信仰、(2)心の多層性、の観点からなされた。A氏のデータを、「自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容」の観点から検討し、多様性や能動性の獲得、他者との関係性の変容が、連鎖的に生じていったことが確認された。

両氏の箱庭制作面接への系列的理解によって、両氏への個別的理解を深めることができた。同時に、系列的理解によって、継続的な箱庭制作面接の連続性が、促進機能をもち、箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進に寄与することを示すことができた。

キーワード：継続的な箱庭制作面接、主観的体験、系列的理解、単一事例質的研究

I. 問題および目的

本稿は、継続的な箱庭制作面接における箱庭制作者の主観的体験(subjective experience)のデータを基に、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討することを目的とする。

本稿は、継続的な箱庭制作面接のデータを基にしている。A氏は10回の箱庭制作面接を、B氏は8回の箱庭制作面接を実施した。箱庭療法では、面接が継

続される中で、クライアントの心に変化や成長が生じてくる。そのため、箱庭療法で継続的に箱庭制作が成された場合、その作品を系列的に理解しようとするセラピストの態度が重視されている（河合、1969、p、15、p.31、他）。箱庭療法過程を扱う事例研究は、まさにこのような態度に従ってなされる研究法である。

それに対して、別稿「M-GTAを用いた箱庭制作面接における連続性に関する促進機能についての検討」で検討したように、箱庭制作過程を精緻に分析しようとする実証的研究では、継続的な箱庭制作に焦点を当てている研究が希少である。そのため、楠本（2012）および楠本（2013a）では、継続した箱庭制作面接における箱庭制作過程および箱庭制作者の内的プロセスの変化や面接の展開（連続性）に焦点を当てた。しかし、楠本（2012）および楠本（2013a）では、一人の箱庭制作者（A氏）のデータに基づいた分析であった。

「単一事例質的研究」（楠本、2013a）は、多元的な方法によって収集された箱庭制作者の主観的体験に対して、多くのディテールを直接的に記述し、それを多層的・総合的に分析する研究法である*¹。本稿では、もう一人の箱庭制作者（B氏）の主観的体験と楠本（2013a）では充分に取り上げることができなかったA氏のテーマに対して、単一事例質的研究を用いて分析する。両氏の主観的体験に対して、調査者が設定したテーマに沿った系列的理解によって、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討することを目的とする。

II. 方法

本稿の基になった研究の調査方法および分析の基礎資料の作成については、

表1 A氏第2回箱庭制作面接における主な主観的体験（楠本、2013aを一部抜粋）

制作過程	自発的説明過程	調査的説明過程	内省報告	ふりかえり面接
(3) [川によって二つに分けられた土地を見ている]	【制作中の苦しさ】 (3) しばらく作ってて、苦しいですよ。なんかくはあ、苦しい>うん。苦しいっていうか。人気がないというか。寂しいというか。二つに分かれちゃったなと思って。(後略)		(3) 【制作・感覚】 大地もいまだ生命がなく、乾燥していて、荒涼としたイメージが私に迫ってきた。「こんなに広い川を作ってしまったでしょう」【 <u>生命のない大地がおそろしい</u> 】と感じていた。	
(11) [白い石を左の陸地奥、川岸に置く。左手前の山を奥に移し、ふもとに土偶と埴輪を置く]	【石と土偶、埴輪】 (11) この辺の手前のほうにはちょっと置けない。手前のほうにいる生き物とはちょっと違う生き物のような気がして置けなかったですね。	【土偶、埴輪】 (11) なんか命なんだけど、命を持っている人として持ってきたんですけどね。 <u>半分命じゃないものになっている</u> っていうか。何ていって言うんでしょうね。人間ではない命になってるとうか。そういう感じがして、こう動物や人の世界には、ちょっと、いけないんだな、入ってきちゃっている。そういう感じですかね (後略)	(11) 【制作・感覚】 土偶もいのちの表現だと思っていたが、 <u>ふもとに置いたことで、命としての人間の代わり</u> のようでもあるし、 <u>山の番人</u> のような気もしてきた。【制作・意味】 石は「かたまり」。自然の造形物だけれども、 <u>生命感</u> は薄くて、動き出すことがないもの。私が左側に置きたかった命とは、そのようなものだったのではないか。 <u>はっきりとした形をまだ持たない、抽象的なもの</u> がよかったのだと思う。	【土偶、埴輪】 (11) <u>土偶はだいが神様の方に近い</u> 。象徴的になってしまっている。深く土の中にもぐって何世紀も経って命の感覚がひどく微かになってしまっている。 【お山】 (11) <u>信仰の対象になるようなお山のイメージ</u> がありましたね。そうすると、お山のふもとに土偶達はいかにもふさわしい。ちょうど山と平地とのちょうど境目辺りに居てくれると、ちょうどころあいがいい。

別稿「M-GTAを用いた箱庭制作面接における連続性に関する促進機能についての検討」または、楠本（2012）、楠本（2013a）、楠本（2013b）を参照されたい。

単一事例質的研究では、箱庭制作面接各回の箱庭制作過程、自発的説明過程、調査の説明過程、内省報告の各データの関連を探るために、各過程のデータを一覧表に再構成した（表1にA氏第2回面接の一部抜粋を例示）。一覧表化により、多元的に収集された、制作者の主観的体験の比較が可能となり、次の分析を行った。a.箱庭制作過程毎に、制作行為、制作内容、制作者と調査者との対話等に関する、箱庭制作者の多様な主観的体験について、その内容や関連性を把握・分析した。b.各箱庭制作面接での、箱庭制作の経過による制作者の主観的体験の変容や関連性を把握・分析した。c.すべての面接における箱庭制作者の主観的体験を比較し、テーマの系列的理解や面接の展開、その個人的意味について、多層的・総合的に把握・分析した。

Ⅲ. 結果および考察

Ⅲ-1 箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、個人的意味の詳細と検討

本章では、調査者が設定したテーマに沿って、系列的理解を実施する。それを通して、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を記述し、検討する。

まず、B氏の主観的体験のデータを「宗教性を中心とした心や生き方の変容」の観点から詳述し、検討する。その後、A氏のデータを「自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容」（楠本、2012に加筆修正）の観点から、詳細を記述し、検討する。楠本（2013a）はA氏のデータに対して「単一事例質的研究」によって分析を行った。そこで考察したテーマである「1）主なテーマと自己像の変遷」、「2）宗教性（命、守り、神聖な場所・生き物）」、「3）女性性、母性」、「4）受動性と能動性、面接内外での深い関与」については、重複を避けるため、本稿では割愛する。「自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容」に関して、楠本（2013a）との重複をできる限り避けるが、一部重複している箇所がある。

箱庭制作者の主観的体験の具体例の中で、考察において検討する箇所に下線を付した。

Ⅲ-2. B氏の主観的体験の詳細と検討

1) 宗教性を中心とした心や生き方の変容の詳細

B氏の第1回箱庭制作面接から第8回箱庭制作面接に亘って、主観的体験の具体例を挙げつつ、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を確認していく。B氏はクリスチャンである。B氏の箱庭制作面接では、宗教性・信仰が主要なテーマとなった。そのため、宗教性を中心にB氏の心や生き方の変容について、詳述していく。

B氏は第1回箱庭制作面接で、中央の砂を掘り、底の青の色を出して、泉(水源)を作った(写真1)。それは、深部からこんこんと湧きでるつきない泉、生命の源、神を示す構成であった。その泉の構成について、B氏は調査的説明過程で中心に、この、まあ、水を置いたんですけども、やっぱり、なんか、人にはなんか核になるような、その、いろんな意味での、その、発想だとか、意欲だとか、いろんな意味で核になる、その中心の部分というのが、うん、やっぱり感じてしかたがないと。で、まあ、そういったものを、自分はそこを中心にして、いろいろ据えていくんじゃないかな(B氏調査、1-2)、と語った。また、その構成について、調査的説明過程で以下のようにも語った。宗教的な建物とか、仏像だとか、マリア像だとかあるわけですよ。まあ、私自身、(中略)そういったもので表わされる大切なものとか、意識として、やっぱりあるわけですよ。で、たぶん、私の中にはその、水といったところで表したものが、そういうものにつながっているようなところがあるんだけど、うん、その実際にそれを表わすのに、十字架を置くとか、マリア像を置くかという、それには、抵抗があったわけです。<なるほど>で、つまり、それが、あの、いかに、その、表現しつくせない。人為的な、その、形っていうんでしょうか。シンボルっていうか、うん、で、それを置くとかえて、その、自分が感じているとか、思っている、その、こんこんとわき出るような躍動感とかいう意味でなんか、表わすにはちょっとみずほらしすぎるというか。うん、でまあ、それは逆に選ぶ気になれなかった(B氏調査、1-2)。泉はB氏にとって、核になる



写真1 B氏第1回作品 砂箱中央に泉。その周りにあやめ、花束、動物。その少し外側に、人々の生活、子どもたち。砂箱右下に兵士や悲しむ人。砂箱右上に船。その横にお地藏様。

ものであり、それが砂箱中央に構成された。その核を中心にして、様々なものが構成されていった。その核となるものは宗教性の表現であり、B氏にとって、こんこんを湧きでるような躍動感をもっていた。それは、十字架やマリア像では表現しつくせない感じがして選ばなかった、とB氏は語った。

同回箱庭制作過程6で、B氏は、「水の恵みを受けて育つ木々を探し、水源周り」に置いた（「」内は、内省報告に記された、当制作過程の内容を示したB氏自身の記述）。制作過程7で、「木が足りないと感じられたので追加」した。制作過程6について、内省報告に泉の生命が周辺に広がる（B氏内省、1-6、制作・意図）、生命が広がり及ぶ（B氏内省、1-6、制作・感覚）、育み（B氏内省、1-6、制作・意味）、と記された。これらの箱庭制作過程の主観的体験は、泉の生命が周辺に広がり及ぶというものであった。

同回でさらに続けて、B氏は、人々の生活、世の幸せと不幸、未知の世界、動植物という命などを構成していった。遊ぶ子どもを置き、それに創造力の豊かさを感じた後、ほぼ最後の箱庭制作過程64であやめや花束を選び、制作過程65であやめを水源の上に、花束を水源の左に置いた。それらの制作過程について内省報告に泉の生命力に花を添えたい（B氏内省、1-64、制作・意図）、世界の豊かさを改めて思い起こす（B氏内省、1-64、制作・感覚）、世界は神様の守りにあることを再認識する（B氏内省、1-65、制作・感覚）、感謝（B氏内省、1-65、制作・意味）、と記した。その内省報告について、第1回ふりかえり面接で以下のように語った。「最終的に、その、水際に生える草を置くとか、ま、水源のところに戻っていったんですね。それはなんとなく、そういった自分で作り上げたものを、あの、そこの部分に、帰したかった。帰するというか、ささげるといふか、うん。そんなような感じで」。B氏は箱庭制作過程のほぼ最後に、世界の豊かさを思い起こし、それは神様の守りのおかげであることを再認識し、感謝の念をもって、泉の生命力に花をささげた、と捉えられる。

B氏は第2回箱庭制作面接で、中央やや左寄りに葉のついていない木、その左にイグアナを置いた（写真2）。これらの構成には日常生活における攻撃的な人々やそれに苦しんでいる自分の心情が表されていた。その後、箱庭制作過程24で、亀を右手で空中にもったまま、左手で、中央下の砂を払いのけ、左右に走る水の道を作った。制作過程25で、水の道の左端に亀を置いた。制作過程24について、B氏は内省報告に乾きと寄るべき者、道筋の存在に気づく（B氏内省、2-24、制作・意図）、どうにか支えられてきたことを思い返す（B氏内省、2-24、制作・感覚）、神、仲間（B氏内省、2-24、制作・連想）、他力（B氏内省、2-24、制作・意味）、と記した。そして、第2回ふりかえり面接で、その制作過程について以下のように説明した。「水の道っていうか。その、そういった道筋みたいなものを作り始めました。これは乾いてるなーっていう乾き、あと、その、寄るべきものとか、たどっていくようなそういった道筋の、そういった存在ってところのものを思えて、どうにか、支えられてきたんだよなー

と。そういったことを思い起こしました。で、まあ、それを例えば、その、神様っていう言い方もできるし、信仰という言い方もできるし、まあ、とき、その時、その時で、その、まあ、一緒にやってきた仲間たちっていうものもいたし。いろんなところで助けられてきたなーっていうことを思って。その結果、今、やってけるんだよなーって。そういう意味では、他力本願っていうわけではないんだけど、自分のがんばりだけでは続けてこれなかったものは、どうしてだろうかというようなところで、他からの助けだとか、いろんなものがあった、と。それが水の道っていうところで、その、表現したかったというか。しようとして、掘ってったということですね]。B氏は自分が乾いていることに気づいた。同時に、寄るべきものとしての神、支えてくれた仲間の存在に気づいた。そして、他の存在から助けを受けている自分がたどっていく道筋として、水の道を作った、と捉えられる。

さらに同回箱庭制作過程35で、B氏は、十字架をカメの背に載せた。その制作過程について自発的説明過程でシンボリックな意味で、こういう苦勞っていうところの部分は、(中略)イエスが歩まれた、そういったところの道についてうじりかなとかいうところで (B氏自発、2-35)、と語った。そして、内省報告には、自分に救済の力はないが、共感が深まる (B氏内省、2-33、制作・感覚)、と記された。B氏は、今自分がしている苦勞はイエスが歩んだ道についてうじりものと感じ、イエスへの共感が深まったことが示された。B氏は、第2回箱庭制作面接の前半では、日常生活における様々な苦しい出来事やそれに対



写真2 B氏第2回作品 砂箱左手前に十字架を載せたカメ(自己像)。砂箱中央左にバオバブの木。イグアナとチェーンソーや斧をもつ人。籠に入ったルーペやガラス瓶。砂箱中央に仕切り。砂箱右側に天使、花束、テーブルとイス。砂箱四隅に森。

する自分の心情を巡る構成を行った。しかし、途中から神やイエス、仲間たちの支えを思い起こし、箱庭制作過程のほぼ最終段階では、イエスへの共感をさらに深めることができた、と捉えられる。

B氏第3回箱庭制作面接では、砂箱右上隅に置かれた自己像である星の王子様が、身近なところから将来に向けて鳥瞰したり、思い出を思い返すというテーマの構成がなされた（写真3）。山あり谷あり、障壁もありという生き様であったことが第3回ふりかえり面接で語られた。

調査的説明過程で、調査者はB氏に作ってみて意外なものはあったか質問した。それに答えてB氏は以下のように述べた。意外なものといえば、うーん。このいわゆる真珠とか、ポストとか、雨の降ってるという状態のと、木っていうところで。まあ、この真珠で埋め尽くされるようなことはあの全然思ってもみないんだけど。ぼつりぼつりと、いいこともあるかなとか。まあ、なんか、思わぬ、その、悪い出来事じゃない意味でぼつぼつと自分自身になんか知らせてくれるような、なんかニュースなりとかも起こるかとか。まあ、雨降ってというところでの、なんか、みずみずしさとか、うるおいとかも含めて。そういうことも、それこそ自然っていうか。そういう中で、起こってくることもあるんだよな。だから、このあたりのこと、むしろ、ある意味、生きてれば、うん、誰にとっても起こりうる、そういう、なんか、自然の理っていうか。そういうところの中のものも、うん、なんか、改めて思い起こすことができたというか。そんな感じですね。あ。もう一つ。遊びを入れなきゃいかんということを‘笑’（中



写真3 B氏第3回作品 砂箱右上に星の王子様（自己像）。ミッキーマウス、鳥籠。砂箱中央に橋、祈る2体の人形、籠に入ったガラス瓶、やしの木とガラス片、ミニカー、時計、郵便ポスト、真珠。砂箱左下に十字架、トンボ。砂箱右下と左上に森。

略) やってて、どうも、あの、うん、そういう要素が見て、自分でも足りんなーとかいうのが(B氏調査、3-全体的感想)。この語りでは、箱庭制作によって、意外な構成から自分の心や生き方への気づきがあったことが示された。それは、ポストや真珠や雨やミニカーを用いた構成に関する主観的体験であった。自発的説明過程や内省報告のデータも含めると、ポストや真珠は、思わぬ時にいい知らせがあったり、いいことがあったりもするというイメージが付与されていた。雨は、みずみずしさやうるおいのイメージであるとともに、生きてれば、うん、誰にとっても起こりうる、そういう、なんか、自然の理っていうか。そういうところの中のものも、うん、なんか、改めて思い起こすことができた、という主観的体験を生んだ。ミニカーは生活に娯楽のなさ(B氏内省、3-31、制作・意図)、どこか面白みのない生き方かな?(B氏内省、3-31、制作・感覚)という意図や感覚があり、選ばれ、置かれた。これらの主観的体験は、山あり、谷あり、障壁もありという生き様を補償するようなものであり、今後の課題である、と捉えられる。

同回で、砂箱中央に置かれた2体の祈る人形や左下に置かれた十字架は、祈りや信仰と関連していた。祈る人形には、自己の生き様に関する以下のような思いが反映されていた。気持ち的には、祈り心なしには、その、つながっていけない。その、あんまりやっぱりしかりとした、あの、基盤とか、そういったものが見通しの中で、その、うん、あの、誰も保証されてはいないだろうけども、厚みとかいったら、何が起こるかかわかんない。なにか一つ大きなことがあれば、あの、とん挫しちゃうよな。そういった、なんというんでしょう。不安にはなってな、不安という様子(?)はないんだけど、じっくり慎重にことを構えてという意味での、祈り心で(B氏自発、3-18)。十字架について内省報告に、信仰の実感(B氏内省、3-37、制作・意味)、信仰が支えになってきたという感慨感(B氏内省、3-37、制作・感覚)、信仰(B氏内省、3-37、自発・意味)、と記された。この箱庭制作過程に関して、第3回ふりかえり面接で、以下のように語られた。[時に応じて、信仰っていうものが支えになってきたかなという。ここの信仰の実感というのは、橋を選ぶっていう時の、守られていた、守られてきたという感覚よりも、むしろより自分の意思って、いうんでしょうかね。そういった部分を感じて、耐えてきたなっていう部分を思い出していました]。[実際の思い悩みとかいろんな障害とかがある中で、それにどう関わっていくのかという意味での、実際の意味での力になっているんだなっていうこと。改めて、箱庭制作する中で、意識化されてるところです]。B氏は、何が起こるかかわからず、大きなことがあれば頓挫してしまうような人生において、祈り心は基盤であり、慎重にことを構えることが必要だと考えていた、と捉えることができる。そして、信仰が支えになったという実感や、現実の障害や思い悩みに対して信仰が実際的な力になり、自分の意思で耐えてきたことを箱庭制作過程で改めて意識化し、祈る人形や十字架が選ばれ、

置かれた、と理解できる。

B氏は第4回箱庭制作面接で、砂箱左上隅のロッキングチェアに立つ自己像である星の王子様が、思い出の土地やそこに住む人々を眺めているという構成を行った(写真4)。B氏は、第4回箱庭制作面接の箱庭制作過程2で、ロッキングチェアを選び、制作過程3で、それを砂箱の左上隅に置いた。その制作過程について、自発的説明過程で比較的なんか、今日のなんか私自身の気分がまあ、ゆったりとしていられるような、そういった気分があったんだと思います。それで、こういうロッキングチェアみたいな、その、あの、座った時にはゆらゆらしてくつろいでいられるようなものを置きました(B氏自発、4-2)、と語った。例えば、第2回箱庭制作面接では、日常生活における困難に対する苦しさの一つのテーマとなった。しかし、今回はそれとは異なり、ゆったりとしていられるような気分であったことが、構成に影響していた。

同回でB氏は、制作を続ける中で構成された風景から、「確かこんな風景あったぞ」と、かつて行ったことのある土地やそこにいた人々のことを思い出した。その後、意図的に、その土地やそこにいる人々に関連する構成を行っていった。その土地や人々が自分に与えた影響について、自発的説明過程で、以下のよう

に語った。自分が(中略)よい環境というところの感覚っていうんでしょうか。そういったものは、例えば、人と人のつながりであったりとか。まあ、その、自然っていうんでしょうか。そういう風景だとか、というところで。ああいう世界とか、その、人との関係とっていうのが、自分にとって、あの、まあ、心地よ



写真4 B氏第4回作品 砂箱左上にロッキングチェアに乗った星の王子様(自己像)。砂箱左側に馬、バス。牛(自己像)。砂箱中央に橋。右に施設の人々、トンボ。海にイルカ、船。浜辺に貝殻。丘に木々。

いっていか、そういう世界なんだなっていうのを、この、連想っていか (B氏自発、4-複数過程に亘って)。その土地やそこでの人々とのつながりの中で、自分が心地よく、くつろいでいた感覚を思い起した。第4回箱庭制作面接では、信仰や宗教性を巡る言及は直接的にはなかった。しかし、B氏が心地よいと感じ、くつろぐことできた人々は、キリスト教精神を一つの重要な基盤としてもつ施設の人々であった。

B氏第5回箱庭制作面接の箱庭作品は、日常生活での苦しい状況が色濃く反映されたものとなった (写真5)。そのため、部分的に第2回箱庭制作面接と関連の強いテーマが、再度表れた。B氏は第5回箱庭制作面接で、砂箱奥に小人、なげき悲しむ人、かたつむりなどを、砂箱中央に星の王子様とルーベを置いた。B氏は、自発的説明過程で砂箱の奥の構成に関して、ちょっと怒っている自分とか、悲しいなという自分や、ほかしちゃったなとこだとか、ちょっとなんかのんびりしたいっていうとこだとか、あの、えいやーとかいう感じとか。そういう気持ちが入り混じっていうようなところを (B氏自発、5-複数過程に亘って)、と語った。星の王子様とルーベについて内省報告に、抑圧的で観察的な感情感覚 (B氏内省、5-4、調査・感覚)、と記した。砂箱奥に、ネガティブな要素も含んだ自分に渦巻く情緒が構成され、中央の星の王子様がそれを抑圧的に観察していた。

砂箱手前の、星の王子様の背後には、教会、ベッドに横たわるタキシードを着た人形、小瓶、ワニ、橋、大砲、子どもの人形などを置いた。星の王子様の



写真5 B氏第5回作品 ルーベを覗く星の王子様 (自己像、砂箱中央)。砂箱奥に渦巻く情緒 (頭をかく小人、悲しむ人、カタツムリ、子ども、怒っている小人)。砂箱手前に、念慮すること (時計、ベッドに横たわる男性、教会、ガラス瓶、ワニ、橋、荷車、大砲、子どもたち)。砂箱四隅に、森。

背後に置かれた教会、ベッドに横たわるタキシードを着た人形、小瓶、ワニ、橋、大砲、子どもの人形の構成に関して、自分の背後にある念慮していること（B氏内省、5-複数過程に亘って、制作・意図）、と記された。B氏は自身の体調がすぐれず、仕事上の困難を抱えていた。砂箱中央下に置かれたワニは、B氏が被っている攻撃性が表現されていた。この結構口が目について。あれより、もう少し、今日なんか見た感じが、その、ガブッと、というような‘笑’。その、印象を受けて（B氏調査、5-15）、と語った。第2回箱庭制作面接で置いたミニチュアよりも、今回のワニの方が「ガブツ」と嘯みつく印象がより強いことが語られた。

しかし、そのような困難な状況の中でも、それに向き合おうとするB氏の思いが調査的説明過程で、以下のように語られた。結構仕事とか（中略）いろいろある中で、体調もすぐれなくて、今も、い、痛みがあるんですけど。（中略）攻撃性の強い方だとか、そういったところで、随分、消耗してて。（中略）背負っているものもいろいろある中で、っていう中で。うん。いるんだなって。なんか、作って自分でも。わりあい冷静でいるというか。ひどく落ち込むとか、怒り狂って、投げ出してやるっていう風ではなくて。まあ、あの、うん、あのいろいろあるけど、うん、しょうがないなという部分と、まあ、ちゃんと時間かければ、まあ、できないことないわっていうような、そういうような感覚とか、ということであって、わりあい冷静でいるというか（B氏調査、5-全体的感想）。仕事上のことで背負っているものがたくさんあり、体調も悪い中で、B氏はさらに別の乗り越えるべき課題をも抱えていた。しかし、それらに対して、ひどく落ち込むとか、投げ出すとかという姿勢ではなく、わりと冷静に事態に向き合っていることが示された。調査者には、B氏が現状や自分自身に真摯に向き合い、関わっているように感じられた。

第5回箱庭制作面接では、B氏の上に示したことは違う側面についての気づきも現れた。B氏は、針葉樹を砂箱四隅に置いた。その構成について内省報告に無意識の領域（B氏内省、5-6、制作・意図）、今は脇に追いやられている諸々の心の部分（B氏内省、5-6、制作・感覚）、と記された。その構成について、調査的説明過程で以下のように語った。これまでの制作の時に、私自身、傾向かなって思うところでもあるんですけど。この、こうやって出てきたものを、四隅までこの全面に張り巡らせるっていうほどの、私自身が、馬力がないでしょうかね。とにかく、こちら辺の世界でまあ、それ以外の、その、なんか、部分ということで。なんか、うん、四角い枠を森を作ることで、丸い枠に限定して、うん、世界を作ってるかなという。<なるほど。なるほど。なるほど>うん。うん。たぶん、もっと、その馬力があれば、この、ガシツともっと置く力のある人もいるのかなと思うんですけど。どうも私は、うん。四隅ぎりぎりまでのを置くっていう、その、うん、強さがないような気がします（B氏調査、5-複数過程に亘って）。B氏は、この構成に関して、四隅ぎりぎりまで構成する

強さ・馬力が自分にはないという自分の特性だ、と語った。これに類似の、森によって区切りができるという構成は、第2回および第3回箱庭制作面接にも表れていた。このような構成が連続することによって、B氏は構成の象徴的意味について、気づくことができた、と捉えることができる。しかし、第6回箱庭制作面接以降は、四隅に森を作ることで、丸い枠に限定するといった構成は現れない。この変化は「領域の拡大」(河合隼雄、1969、p.47)、と捉えることができる。

B氏第6回箱庭制作面接の箱庭作品は、今までの作品とは構成が大きく異なっていた。本項では、連続性について記述しているが、そのような意味では、第6回箱庭制作面接の箱庭作品は、それまでの作品と非連続的な作品と言えるのかもしれない。

作品のテーマは、再生であった(写真6)。B氏は、第6回箱庭制作面接の箱庭制作過程5でイルカを左上隅の海に置いた。制作過程7で島の中央やや上のあたりから中央に樹木を置いた。制作過程9で海草を島の下方の浜辺に置き、針葉樹を島に点在させた。制作過程11で鳥の巣を島の中央の林の横に置いた。制作過程13で島の左側に石仏を埋めた。制作過程20で埴輪を島中央の上の部分に埋もれさせた。制作過程22で、埴輪の右横にガラス片、真珠の一部が埋まるように置いた。制作過程24で亀、魚を右側の海に置いた。そのような箱庭制作過程について、B氏は自発的説明過程で以下のように語った。どちらということ、気持ち的には、再生してく、という印象、気持ちがあって。だから、そういう



写真6 B氏第6回作品 砂箱中央に再生する木々、鳥の巣。その周囲にも木々。奥に埴輪、真珠、ガラス片、トンボ。左に石仏。浜辺に貝殻。海にカメ、魚、イルカ。

ようなところでは、そういう木々が生えてきて、草が、実の(?)、生えてきて、多少なりとも、実のなるものをこうやってついているような状況の中で、鳥もやってきて、巣を作ったりとかというものを、その、この中心に置きたかったと。(中略) 再生ということをいったんですけど、そういう意味では、昔、いろいろ、人が住んだり、なんかやってたという。そういう痕跡みたいなものが。その、そうですね。この遺跡に近いような。遠い昔にそういう風にあったけれども、なんらかの理由でうち捨てられて。でも、しばらく経って、まあ、あの、自然みたいなもの、環境も落ち着いて、草木が萌え出て、鳥もやってきて。その周りでは、この陸地のことや状況と関係なく、まあ、その、海に生きるものは、それまで通り、ずーとその、生活をしてる。そういう営みがあるっていう。そういう、状況を作りましたね (B氏自発、6-複数過程に亘って)。鳥の中央の木々、周辺部の木々、鳥は、再生というイメージが付与された、と捉えることができる。再生が中心部から周辺へ広がっていった。そして、海の生き物は、石仏や埴輪に表された人の営みの遺跡や陸地の状況とは関係なく、それまで通りにずっと生活しているというイメージが付与された、と考えられる。つまり、この構成には、中央から周辺へという空間的広がりが表現された。また、過去・現在・未来(再生の継続)という時間軸、陸地とは関係のなくずっと続いている海の営みという時間の多様性が表現されている、と捉えられる。

第6回箱庭制作面接の特徴の一つとして、直接的に表現された自己像がない点、また、自分個人の特性への気づきがほとんど報告されない点が挙げられる。このような点においても、今回の作品は、今までの作品と非連続的である。この回で、自分自身との関連が語られたのは、以下の部分である。

調査的説明過程で、調査者が、再生するということについての連想を尋ねると、B氏は最近の生活の中で取り組みはじめたことや気持ちの回復について述べた。その後、調査者がこの箱庭における再生はどれくらいの年限がかかって起こってきたのかを尋ねた。すると、B氏は、自分自身でも矛盾するようだがと言いつつ、中央部の再生は感覚的には1年と2年というわりと短い期間に起こったものであること、しかし、人の痕跡は、何十年、何百年前に自分とは無関係に作られたものが風に吹かれ、波に洗われて出てきたものというイメージがあると語った。そのような構成や語りについて、内省報告に人としての自分 (B氏内省、6-複数過程に亘って、調査・意味)、人の歩みの歴史 (B氏内省、6-複数過程に亘って、調査・意味)、と記した。そして、第6回ふりかえり面接では、以下のように語った。[矛盾するが、置いたのは昔のものである。近代的なものではない。感覚的には1年とか、割合身近な感覚があるっていうことで。まあ、片っ方では自分自身の変化の兆しかなくってということだけでも、もう片っ方では、昔から人の営みは変わらないのと、こういうことを繰り返してきたんだろうっていう、まあ、そういう意味でのところが、会話の内容が矛盾するか、ようだなっていうことに結びつくんですけども。まあ、繰り返しっ

ていうことで、まあ、人としての自分とか、人の歩みの歴史っていうこの両方が、なんか、そこにあるかなーって、意味として。<人としての自分っていうのは>というのは、今、このなんか、意欲が戻りつつあるのかなーっていう自分自身と、まあ、人一般に置き換えれば、いろんなことあるけれど、こういうことを繰り返して、あの、来てるっていうのが、人の歩みかな。そういうものが、その両方、この、遺跡と、この木の再生っていうのを]。B氏は、これらの表現について、意欲が戻りつつある今の自分に関連させている。しかし、主要な力点は昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩みの方にあった、と捉えられる。つまり、この回の全体の文脈としては、B氏は個人的存在としての自分に触れつつも、人の歴史の中に位置づいている存在としての自分に、より焦点化されている、と考えることができる。

B氏第7回箱庭制作面接は、第6回箱庭制作面接に続いて、抽象度の高い作品であった。B氏は第7回箱庭制作面接で、4つの区画を作るとともに中央に十字形の構成を行った（写真7）。4つの区画は、それぞれが小さな箱庭のような感じもあった。その後、それぞれの区画に、四季を表現していった。さらに四季という表現から、巡っているというイメージが湧いてきた。巡るという時間の流れは、B氏が今まで箱庭制作面接を重ねる中で、日常生活でも様々なことがあったその過去と、新しい年度を迎えようとする今、心を新たにするような思いが反映したものである、と捉えられた。この構成を通して、そのような自己の心やあり様への気づきが生まれた、と捉えられた。

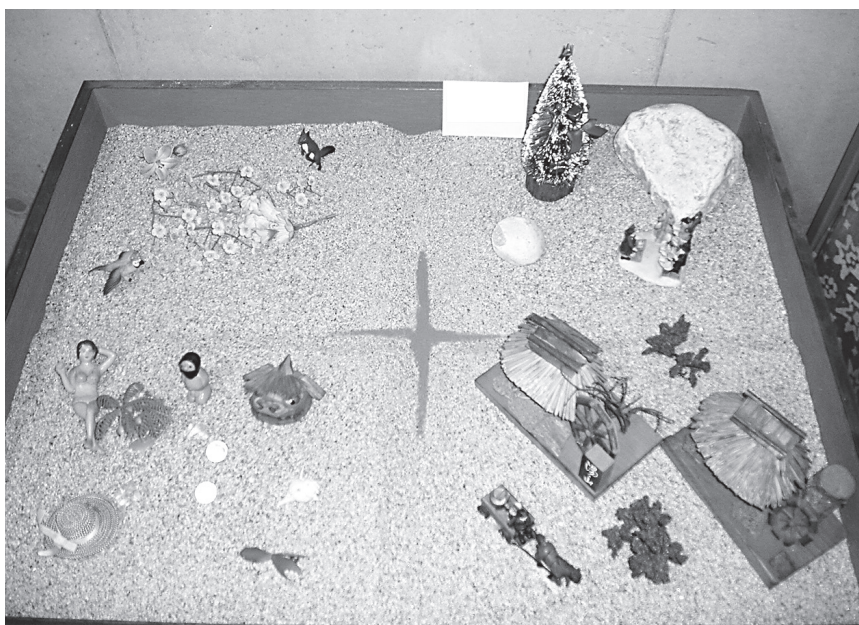


写真7 B氏第7回作品 砂箱中央に十字形。4つの区画に四季。砂箱左上、春（リス、花、青い鳥）。砂箱左下、夏（祭り、水着の人、やしの木、ビー玉、貝殻、帽子、金魚）。砂箱右下、秋（和風の家、実のついた木々、馬車に乗った人）。砂箱右上、冬（クリスマスキャロルを歌う人々、雪がつもった木、白い石）。

宗教性のテーマに関して、以下のような主観的体験があった。中央の十字形についてB氏は調査的説明過程で宗教的に、その神様とか仏様とかっていうようなものも言えるだろうし（B氏調査、7-全体的感想）、と語った。この構成は神様や仏様という直接的な宗教的イメージにとどまらず、多義的なイメージをもっていた。十字形の構成は、巡るという客観的な時空間の核であり、それらを見る自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。

第7回箱庭制作面接と第8回箱庭制作面接の間に、B氏に予想しなかった転任の打診があった。第8回箱庭制作面接は、B氏の転任が、ほぼ決まった後に行われたため、構成内容はそれが強く反映したものとなった（写真8）。箱庭制作過程1で、船出していくイメージが湧いて、B氏は船を選んだ。その後の制作過程で、B氏は川と海を作り、最初に選んだ船と七福神の宝船を川と海に置いた。その後、陸に木を植え、イルカを海に置いた。ガラスの小瓶を砂箱左に置いた。ルーペを砂箱中央に置き、それを覗くように小人を置いた。人を導く天使を制作過程19で選び、制作過程20でそれを小人の背後に置いた。ほうきにまたがった人を手前の丘に置いた。海に生き物を加えた。船を砂箱右上に置き、最後に七福神の宝船の位置を修正して、制作を終えた。

人を導く天使について、内省報告に以下のように記された。不思議な導きと信頼（B氏内省、8-19、制作・意図）、信仰と信頼（B氏内省、8-19、制作・感覚）、委ねる（B氏内省、8-19、制作・連想）。そして、その箱庭制作過程について、第8回ふりかえり面接で以下のように語った。[イメージや感覚と



写真8 B氏第8回作品 砂箱奥の丘中央にルーペを覗く小人（自己像）。その背後に天使に導かれる人（自己像）。ガラス瓶、木々。下の丘にホウキの乗った人、木々。川に船。海に船、宝船、クジラ、イルカ、ヒラメ。

しては、信仰や、信仰的なこともある、たぶんにあると思うんですけども、導かれるままにっていう感じの意味で、そういう。あと信頼っていうことで。連想としては、いろいろ迷っててもしょうがないということで、委ねるっていう]。今回の転任にあたって、B氏は不思議な導きを感じた。そして自己の信仰を基盤として、導かれるままに委ねて進むことを選んだ、と捉えられる。

B氏第8回（最終回）箱庭制作面接の調査的説明過程で、B氏は今回の箱庭制作を含む、直近複数回の箱庭制作に関する全体的な感想として、以下のように語った。日常生活での変化として、第7回箱庭制作面接と第8回箱庭制作面接との間に、B氏に思いがけない転任の打診があった。それは喜びであるとともに、あまりにも予想を超えた打診であったため、戸惑いをも感じさせるものであった。あの、結構、その、箱庭の、その、制作をしていて。で、何回くらい前かな、2回くらい、2回くらい確実にあったと思うんですけども、その、言うとしんどい思いを、そのしつつ、という中で箱庭を作り始めて。また、新しい年度の、そういう歩みがまたやってくるっていうような、そういう、あの、気持ちの上での変化とか。まあ、自己修復の兆しみたいなものが出てきて、その中で、こういう話が出てきて。あの、うん、まあ、その、導かれるままに、その、出ていくかっていうとこに辿り着いてったというところでは、まあ、あの、不思議さを感じるとともに、あの、一つの、あの、うん、区切りっていうのが、なったのかなという感じるんですけど。<なるほど。なるほど>それがまあ、具体的な、その、●（転任先地名）に行くということでの区切りなのか。それはほんとに今月末にならないと。ただ、なんか、そういうことでは、その、傾向からいったら、いろいろあったけど、また、新しい年度から、また、気持ち新たに歩むかみたい、取り組むかみたいなどには、行き着いたのかなっていう感覚はあります（B氏調査、8-全体的感想）。その語りについて、内省報告に、不思議（B氏内省、8-全体的感想、調査・連想）、と記した。先に記したように、第6回箱庭制作面接と第7回箱庭制作面接で、再生のテーマや新しい年度に向けて心を新たにしようとする思いが現れた。そのような流れの中で、再出発の打診が現実生活でもあった。このような外的・内的状況の中で、今回の箱庭制作面接で、天使に導かれるままに、新たな場所に出ていくという構成が生まれた。実際に新しい土地にいくという点においても、気持ちの上でも、一つの区切りかと感じた。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開に、B氏は不思議を感じた、と捉えることができる。

このような不思議な外界と内界の一致について、第8回ふりかえり面接でB氏は「実言うと、制作を始める、その、この始めた段階から、実はなにかしらの、なんか、準備期間だったのかなとかという風にも思える、と。あんまり、それを言うと、宗教かってなるんですけど笑、でも、実際、そういうプロセスを歩んできたんだよな一っていうのは、思うんですよね」、と述べた。このように外界と内界の不思議な一致の一面として、B氏は宗教性・信仰と関連させて

理解していた。また、B氏は箱庭制作面接の中でも、日常生活においても、自分自身の心や生き方、周りの状況や人々に対して、真摯に向き合い、自己の課題に主体的に取り組んでいたことが、このような展開や気づきに寄与している、と調査者は捉えた。

2) 宗教性を中心とした心や生き方の変容の検討

B氏の第1回箱庭制作面接から第8回箱庭制作面接に亘って、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討する。まずは、その概要を確認する。

B氏第1回箱庭制作面接で砂箱中央に構成された泉は、こんこんを湧きでるような躍動感をもつ宗教性の表現であり、核になるものであった。続けてB氏は、その泉の生命が周辺に広がり及んでいくという構成を行った。B氏は同回の箱庭制作過程のほぼ最後に、世界の豊かさを思い起こし、それは神様の守りのおかげであることを再認識し、感謝の念をもって、泉の生命力に花をささげた。このように、B氏第1回箱庭制作面接は、宗教性、信仰が中心的なテーマとなった。それはB氏の心のあり様や生き方にとって、まさに核となるものであり、宗教観・信仰に基づいた世界観が表現された。

B氏第2回箱庭制作面接では、まず、日常生活の中での攻撃的な人々やそれに苦しんでいる自分の心情の表現が構成された。その後、左右に走る水の道を作り、その左端に亀を置いた。B氏は自分が乾いていることに気づいた。同時に、寄るべきものとしての神、支えてくれた仲間存在に気づいた。そして、他の存在から助けを受けている自分がたどっていく道筋として、水の道を作った、と捉えられた。さらにB氏は十字架をカメの背に載せた。B氏は、今自分がしている苦労は、イエスが歩んだ道につじめるものと感じ、イエスへの共感が深まったことが示された。B氏は、第2回箱庭制作面接の前半では、日常生活における様々な苦しい出来事やそれに対する自分の心情を巡る構成を行ったが、途中から神やイエス、仲間たちの支えを思い起こし、箱庭制作過程のほぼ最終段階では、イエスへの共感をさらに深めることができた、と捉えられた。

第3回箱庭制作面接では、砂箱右上隅に置かれた自己像である星の王子様が、身近なところから将来に向けて鳥瞰したり、思い出を思い返すというテーマの構成がなされた。そこに構成されたものは、山あり谷あり、障壁もありという生き様であったことが第3回ふりかえり面接で語られた。今回の箱庭制作で、ポストや真珠や雨やミニカーを用いた意外な構成から自分の心や生き方への気づきがあった。それは、例えば、ポストや真珠には、思わぬ時にいい知らせがあったり、いいことがあったりもするというイメージが付与されていた。同回で、砂箱中央に置かれた2体の祈る人形や左下に置かれた十字架は、祈りや信仰と関連していた。B氏にとって、何が起こるかわからず、大きなことがあえば頓挫してしまうような人生において、祈り心は基盤であった。そして、信仰が支えになったという実感をえた。現実の障害や思い悩みに対して、信仰が実

際的な力になり、自分の意思で耐えてきたことを箱庭制作過程で改めて意識化し、祈る人形や十字架が選ばれ、置かれた、と理解できた。B氏の人生は山あり、谷あり、障壁もありというものであった。そのような状態であったからこそ、信仰が支えになったことや、現実の障害や思い悩みに対して信仰が実際的な力になっていたことなどを実感、再確認できたことは、B氏にとって大きな意味があった、と考えられる。

第4回箱庭制作面接は、第2回および第3回箱庭制作面接とは雰囲気の違いがなされた。第4回箱庭制作面接の途中でB氏は、構成された風景から、かつて行ったことのある土地やそこにいた人々のことを思い出した。その土地やそこの人々とのつながりの中で、自分が心地よく、くつろいでいた感覚を思い起した。第4回箱庭制作面接では、信仰や宗教性を巡る言及は直接的にはなかったが、B氏が心地よいと感じ、くつろぐことのできた人々は、キリスト教精神の一つの重要な基盤としてもつ施設の人々であった。

第5回箱庭制作面接の箱庭作品は、日常生活での苦しい状況が色濃く反映されたものとなった。仕事上のことで背負っているものがたくさんあり、体調も悪く、B氏はさらに別の乗り越えるべき課題をも抱えていた。しかし、それらに対して、ひどく落ち込むとか、投げ出すとかという姿勢ではなく、わりと冷静に事態に向き合っていることが示された。調査者には、B氏が現状や自分自身に真摯に向き合い、関わっているように感じられた。また、針葉樹を砂箱四隅に置くという構成に関して、四隅ぎりぎりまで構成する強さ・馬力が自分にはないことと関連させて語った。これに類似の構成は、第2回および第3回箱庭制作面接にも表れていた。このような構成が連続することによって、B氏は構成の象徴的意味について、気づくことができた、と捉えることができた。しかし、第6回箱庭制作面接以降は、四隅に森を作ることで、丸い枠に限定するといった構成は現れず、この変化は領域の拡大、と捉えることができた。

第6回箱庭制作面接の箱庭作品は、今までの作品と非連続的な作品と感じられるほど、構成が大きく異なっていた。作品のテーマは、再生であった。再生が中心部から周辺へ広がっていった。そして、海の生き物は、石仏や埴輪に表された人の営みの遺跡や陸地の状況とは関係なく、それまで通りにずっと生活しているというイメージが付与された、と考えられた。つまり、この構成には、中央から周辺へという空間的広がりが表現された。また、過去・現在・未来（再生の継続）という時間軸、陸地とは関係のなくずっと続いている海の営みという時間の多様性が表現されている、と捉えられた。今回の作品の特徴の一つとして、直接的に表現された自己像がない点、また、自分個人の特性への気づきがほとんど報告されない点があった。島の再生や人の生活の痕跡について、意欲が戻りつつある今の自分に関連させつつも、主要な力点は昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩みの方であった、と捉えられた。

B氏第7回箱庭制作面接は、第6回箱庭制作面接に続いて、抽象度の高い作

品であった。B氏は、第7回箱庭制作面接で4つの区画を作るとともに中央に十字形状の構成を行った。4つの区画は、それぞれが小さな箱庭のような感じもあり、それぞれの区画に、四季を表現していった。さらにその構成から、巡っているというイメージが湧いてきた。巡るという時間の流れは、B氏が今まで箱庭制作面接を重ねる中で、日常生活でも様々なことがあった過去と、新しい年度に向け心を新たにするような思いが反映したものである、と捉えられた。宗教性のテーマに関して、以下のような主観的体験があった。十字形の構成は神様や仏様という直接的な宗教的イメージに加えて、巡るという客観的な時空間の核であり、それらを見る自分の内的な核でもあるという多義的な表現であった。

第7回箱庭制作面接と第8回箱庭制作面接の間に、B氏に予想しなかった転任の打診があった。B氏第8回箱庭制作面接は、B氏の転任が、ほぼ決まった後に行われたため、構成内容はそれが強く反映したものとなった。箱庭制作過程1で、船出していくイメージが湧いた。そのイメージを基にして、構成されていった。人を導く天使が置かれた。今回の転任にあたって、B氏は不思議な導きを感じた。そして自己の信仰を基盤として、導かれるままに委ねて進むことを選んだ、と捉えられた。

B氏は、第8回箱庭制作面接の調査的説明過程の最後と第8回ふりかえり面接で、今回を含めたこれまでの箱庭制作面接について、思いを語った。第6回箱庭制作面接から、箱庭制作に自然や自分が修復されていくテーマが、意図せず顕れ始めたことや、第7回箱庭制作面接で構成された多義的な表現について語った。そのような箱庭制作面接の流れの中で、再出発の打診が現実生活でもあった。外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開に、B氏は不思議を感じていた。第8回ふりかえり面接で、箱庭制作を始まる段階からなんらかの「準備期間だったのかなとかという風にも思える、と。あんまり、それを言うのと、宗教かってなるんですけど笑」、でも、実際、そういうプロセスを歩んできたんだよなーっていうのは、思うんですよね」、と述べられているように、この外界と内界の不思議な一致の一面として、B氏は宗教性・信仰と関連させて理解していた。また、B氏は箱庭制作面接の中でも、日常生活においても、自分自身の心や生き方、周りの状況や人々に対して、真摯に向き合い、自己の課題に主体的に取り組んでいたことが、このような展開や気づきに寄与している、と調査者は捉えた。

B氏の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を、(1) 宗教性・信仰、(2) 心の多層性、の観点から検討する。コンステレーションや「面接内外を貫いて内的プロセスを生きる」という観点も、B氏の主観的体験の変容や面接の展開を検討する上で、重要だと思われるが、その点は、別稿「M-GTAを用いた箱庭制作面接における連続性に関する促進機能についての検討」で考察したため、ここでは割愛する。

(1) 宗教性・信仰

B氏の箱庭制作面接において、宗教性・信仰は主要なテーマである。第1回箱庭制作面接～第3回箱庭制作面接、第7回箱庭制作面接と第8回箱庭制作面接で、宗教性・信仰がその回の主なテーマとなった。宗教性・信仰は、第1回箱庭制作面接の泉に関して検討したように、B氏の心や生き方において核になるものであるため、これが箱庭制作面接の主要テーマとなることは当然である。本面接が、そのような個人としての重要なテーマを表現できる場となったことが、箱庭制作面接がB氏にとって意義ある場となったことの基盤だった、考えられる。

しかし、箱庭制作面接として、より重要なことは、第8回箱庭制作面接や第8回ふりかえり面接で語られたように、B氏が宗教性・信仰のテーマに関して、不思議さを体験したことにある、と考えられる。本来的に、宗教性・信仰は、人間を超えたものへの人の思い・体験であるため、不思議な感覚・体験はそれと切り離せないものであろう。しかし、箱庭制作面接の場合、宗教的表現、信仰に関する表現を、意図的・意識的に構成することもできる。そのような意図的・意識的な構成で終わっている場合には、不思議さは生じてこないだろう。B氏が宗教性・信仰のテーマに関して不思議さを体験したことは、B氏の箱庭制作面接において、意識を超えたものが働いていたことの証左の一つと考えることができる。

その不思議さの体験は、以下の第8回箱庭制作面接および第8回ふりかえり面接におけるB氏の語りに集約されている。第8回箱庭制作面接でB氏は導かれるままに、その、出ていくかっていうとこに辿り着いてったところでは、まあ、あの、不思議さを感じる、と語った。第8回ふりかえり面接では以下のように語った。[制作を始める、その、この始めた段階から、実はなにかしらの、なんか、準備期間だったのかなとかという風にも思える、と。あんまり、それを言うと、宗教かってなるんですけど笑、でも実際、そういうプロセスを歩んできたんだよなーってというのは、思うんですね。(中略) 不思議としか言いようがないところがあって、(中略) 外的な要因のことに、それが、どういう風に、どうしてそんな風に、言えるのかっていうことは説明しがたいっていうか。というところがあって、なんか、まあ、そこがいいところでもあるんだけど、わかんない人にはわかんないだろうなっていう世界だろうなっていう笑。そういう風に思うんですけど]。このような事象に関して、ユング心理学的な考察が可能である。例えば、セルフや、別稿で取り上げる予定のイメージの展望的機能^{*2}という概念から説明することもできるだろう。しかし、本項の目的は、B氏の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味の検討にあるため、B氏の主観的体験に密着して検討していきたい。

先に挙げたB氏の主観的体験は、B氏の信仰における神の働きに関する内容を含んでいる、と考えられる。それは、神が、人知を超えた計画をもって、一

人一人の人間に働きかけてくれるということであり、人はその計画に導かれ、使命を与えられて生きていくということである、と考えられる。箱庭制作を始める段階から、何かの準備期間だったのかと思うという言葉と不思議、説明しがたいという言葉は、神の計画の不思議さを物語っている、と理解できる。そのような神の計画の基で、B氏は転任した場所での使命を与えられる。そして、B氏はその神の導きに従い、導かれるまま、新しい使命を果たすべく新しい地に向かおうとする。このような内容を含んだ語り、と理解できる。そのような神の働きを箱庭制作面接で実感をもって体験できたことが、クリスチャンであるB氏にとって箱庭制作面接で生じた最も重要なことだった、と考えることができる。

B氏は箱庭制作過程の中で、自らの宗教性・信仰を巡る内的プロセスを照合し、受け止め、表現することができた。そして、その表現・構成から自分の心や生き方への気づきをえることや再確認をすることができた。継続的な箱庭制作面接における内界と構成との交流から、作品の変化や自分の心の変化・成長を実感していった。後に検討するが、その変化には第6回および第7回箱庭制作面接での心の深層からの表現・構成も寄与した、と考えられる。変化の重要なテーマとして、宗教性・信仰があった。そして、最終回を迎えるころに、外界・箱庭制作面接・内界の一致という不思議な体験が起こり、それをB氏は自らの信仰との関係の中で、意味づけることができた。このような体験を通して、B氏は神の偉大さ、不思議さを再確認し、信仰をより深めることができた、と理解できる。

この不思議な体験の基盤となった事柄についても検討したい。それは、第1回箱庭制作面接～第3回箱庭制作面接、第7回箱庭制作面接で、B氏が示した自己の信仰への真摯な態度である、と考えられる。B氏は、それらの箱庭制作面接で、神の守りや支えを実感・体験していた（第1回箱庭制作面接～第3回箱庭制作面接）。小さきものとして、神の守りに謙虚に感謝し、花をささげるという行為を行った（第1回箱庭制作面接）。信仰を共にする仲間からの支えや助けがあったことを再確認した。苦難を体験したキリストへの共感が深まった（第2回箱庭制作面接）。信仰が、実際の思い悩みとかいろんな障害などに関わっていく際に、実際的な意味での力になっていることを再確認した（第3回箱庭制作面接）。根底にあり、客観的時空間の核でもあり、自己の内的な核でもある存在に思いを向けた（第7回箱庭制作面接）。

また、信仰を背景としたB氏の思いや真摯な生き様も不思議な体験を生んだ基盤の一つと考えられる。山あり、谷あり、障壁もありという生き様の中にも、いい知らせやうるおいという自然からの恵みがあることに気づいた（第3回箱庭制作面接）。キリスト教精神を基盤とする施設の人々との心地よいつながりを想起し、実感した（第4回箱庭制作面接）。他者の攻撃性や体調などに困難を抱えつつも、現状に真摯に向きあい、関わっていた（第5回箱庭制作面接）。

このような信仰に裏打ちされた態度や真摯な姿勢を、継続的な箱庭制作面接の中で、B氏は一貫して示していた。B氏の一貫した態度と箱庭制作面接の連続性の促進機能が相まって、宗教性に関する不思議な体験やその気づきが生まれた、と理解することができよう。

(2) 心の多層性

本項では、ユング心理学的な知見を参照して、(1) 宗教性・信仰とはやや違う観点から検討する。ユング心理学では、心は多層的である、と考える(河合隼雄、1967、pp.93-95)。心の多層性の観点から、B氏の第6回および第7回箱庭制作面接について考えたい。

先に、第6回箱庭制作面接の箱庭作品は、今までの作品と非連続的な作品と感じられるほど、構成が大きく異なっていた、と述べた。また、B氏第7回箱庭制作面接は、第6回箱庭制作面接に続いて、抽象度の高い作品であった、と述べた。それ以前の、第2回箱庭制作面接から第5回箱庭制作面接においては、現実的な世界のテーマが比較的多く含まれていた。そのような箱庭制作面接の流れの中で、第6回および第7回箱庭制作面接の作品は特異的な作品であり、それが調査者に非連続的な印象を与えたのだ、と考えられる。

その特異的・非連続的な作品となった要因は、それらの作品が生み出された心の次元・層が、第2回から第5回箱庭制作面接のそれとは異なるため、と考えることができるのではないか。第6回箱庭制作面接の作品のテーマは、再生であった。再生が中心部から周辺へ広がっていった。この再生に関して、B氏は、一面として意欲が戻りつつある今の自分に関連させていた。第6回箱庭制作面接の調査の説明過程で再生に関して、感覚的には、あの、この1年とか2年とか、わりあい短いような、その感覚があったりする(B氏調査、6-複数過程に亘って)、と語った。この語り箱庭制作過程で表現された再生の時間感覚を正しく説明しているとすれば、再生は、直近(約1ヶ月)の意欲が戻りつつある今の自分と直接的な関連がないことになる。すると、この再生が何を表しているかは具体的には不明だが、1年とか2年とかの時間感覚を伴った再生のイメージである、と捉えることができる。

この構成には、中央から周辺へという空間的広がり、と、何百年前という過去・現在・未来(再生の継続)という時間の関連性、陸地とは関係のなくずっと続いている海の営みという時間の多様性が表現されている、と捉えられた。この表現においても、第6回箱庭制作面接の構成はB氏の現実世界における個人的体験を超えた、より普遍的なものが表現された、と考えることができる。

また、今回の作品の特徴の一つとして、直接的に表現された自己像がない点、自分個人の特性への気づきがほとんど報告されない点があった。島の再生や人の生活の痕跡について、意欲が戻りつつある今の自分に関連させつつも、主要な力点は昔から変わらないより普遍的な意味での人の歩みの方であった、と捉えられた。今回の全体の文脈としては、個人的存在としての自分よりも、歴史

的な存在である自分により焦点化されていた、と考えることができた。この点からも、第6回箱庭制作面接の構成は、B氏の個人的な意識体験を超えたものが表現されていた、と考えられる。

第7回箱庭制作面接は、第6回箱庭制作面接に続いて、抽象度の高い作品であった。4つの区画に表現された四季の風景は、折々の人々の生活や自然のあり様の表現であり、決して抽象度が高いものではない。第7回箱庭制作面接の抽象度を高めているのは、中央の十字形の構成とその主観的体験である。十字形の構成は、宗教的に、その神様とか仏様とかっていうようなものも言えるだろうし。その、それは、その、あの、いわゆるもう少し、なんか、その、地球を動かすような、そういった力だとか、言えるだろうし。でも、気持ちの、内的には、そういうことを見させる自分の中にある、なんか、うん、さあ、また、新しい年度をやっていくか、という気持ちを起こさせる、自分自身のなんか、内にあるようなものを、なんか、あの、現実の四季とかじゃなくて、こういうものを見させる。あの自分の感覚の奥にあるものみたいな。そういうものもあるして。で、そうすると、なんか表現しがたいなっていうか（B氏調査、7-全体的感想）、という多義的な表現であった。また、B氏は、中央の十字形について調査的説明過程で前面に、なんか、この部分があるっていうよりか、まあ、その、背後とか、根底とかにあって、っていうようなところ（B氏調査、7-全体的感想）とも語った。これらの語りから、中央の十字形は、4つの区画に表現された四季の風景とは、心の次元・層が異なる表現である、と考えることができる。

B氏第6回および第7回箱庭制作面接の非連続性や特異性は、心の多層性による次元の異なる表現に起因する、と考えることができる。第6回および第7回箱庭制作面接の作品は、B氏の心の深層より生じたイメージを含んだもの、考えることができる。第6回箱庭制作面接の再生のテーマや時間の多義性、第7回箱庭制作面接の砂箱中央の十字形の部分に、深層のイメージが顕れている、と考えることができよう。そして、このような内的プロセスが、第8回箱庭制作面接や第8回ふりかえり面接で語られた外的状況・箱庭制作面接・内的状況の一致や展開の母胎となった、と考えることができよう。

次に、第6回箱庭制作面接で生じた領域の拡大について、心の多層性との関連から検討したい。第5回箱庭制作面接で、砂箱四隅に森が構成された。その構成について、B氏は自省報告に無意識の領域（B氏自省、5-6、制作・意図）、今は脇に追いやられている諸々の心の部分（B氏自省、5-6、制作・感覚）、と記した。ところが第6回箱庭制作面接以降、砂箱全面を用いた構成がなされた。先に、第6回および第7回箱庭制作面接の作品は、B氏の心の深層より生じたイメージを含んだもの、と考えることができる、と記した。この考えが的を射ているのであれば、第6回箱庭制作面接以降の領域の拡大について、理解が可能となる。この領域の拡大は、深層に向かったの垂直方向への意識の深化に

よってもたらされたもの、と理解できる。あるいは、B氏の意識が、心の深層のイメージとつながりを持ち、それを受け止め、表現できるようになったため、と捉えることもできる。このような垂直方向の深化が、水平方向の領域の拡大を生んだ、と考えられる。第5回箱庭制作面接では無意識の領域であり、心の脇に追いやられていた心の領域に、B氏は触れ、受け止め、表現できるようになったため、以後、その領域を森として表現しなくなった。つまり、意識化・顕在化していないため、その内容が明示的にならない部分が四隅の森として構成された。しかし、第6回箱庭制作面接以降は、それが顕在化し、領域の拡大につながった、と考えられる。

Ⅲ-3. A氏の主観的体験の詳細と検討

1) 自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容の詳細

A氏の第1回箱庭制作面接から第10回箱庭制作面接に亘って、主観的体験の具体例を挙げつつ、「自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容」の観点から、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を詳述する。

A氏は、第1回箱庭制作面接で、砂箱左上に置いてあった緑色の家を白とあわい青色の家に交換した（写真9）。その箱庭制作過程について、内省報告に
白と青の家は落ち着いた、ややさびしい印象。私の内側、ベースはどちらかというどひっそりと静かなものなのだと思う。自分自身にぎやかで活動的とは言



写真9 A氏第1回作品 イルカ（自己像）と亀（セラピスト像または制作者の内的導き手）。砂箱左上にマリア像、家、花、森。砂箱右下に貝やサンゴ。砂箱中央上の浜辺にガラス瓶。

えないと思う (A氏内省、1-10、制作・意味)、と記した。第1回箱庭制作面接時点では、A氏は自分のベースはひっそりと静かなもので、活動的ではないと感じていた。

だが、以後、異なる面を発見していく。第2回箱庭制作面接で、砂箱右下隅にライオンを置いた(写真10)。その箱庭制作過程について内省報告にライオンや恐竜といった力強いもの、時に凶暴なものに憧れのような、親近感のような感覚を抱く。自分が生きていくためには、時に相手を喰らうことも必要(A氏内省、2-9、制作・意味)、と記した。攻撃性の積極的意味に気づいたと理解できる。

第3回箱庭制作面接には、内省報告に、最近の私は以前と比べて、いろいろな場面で、いろいろな自己開示をするようになってきている。(中略)尊大さは薄れ、ただの、ある意味でとても平凡な一人の人間としていられるようになったのかもしれない(A氏内省、3-11、調査・意味)、と記した。自己開示ができていることを認識し、ありのままの自己の受け入れが進んだと思われる。また、同回の箱庭制作過程13で、回遊しているシャチ、イルカ、亀を見つめ、亀の頭の方を陸側から海の沖合の方向に変えた(写真11)。その箱庭制作過程について内省報告に、お互いがお互いの動きを規制しているような輪から外れて、自分の道を進みたいと思っている。独自性を発揮したいと思っている(A氏内省、3-14、制作・意味)、と記した。独自の道を歩もうとしている自分を確認したとみられる。第1回箱庭制作面接ではイルカであった自己像が、カメに変

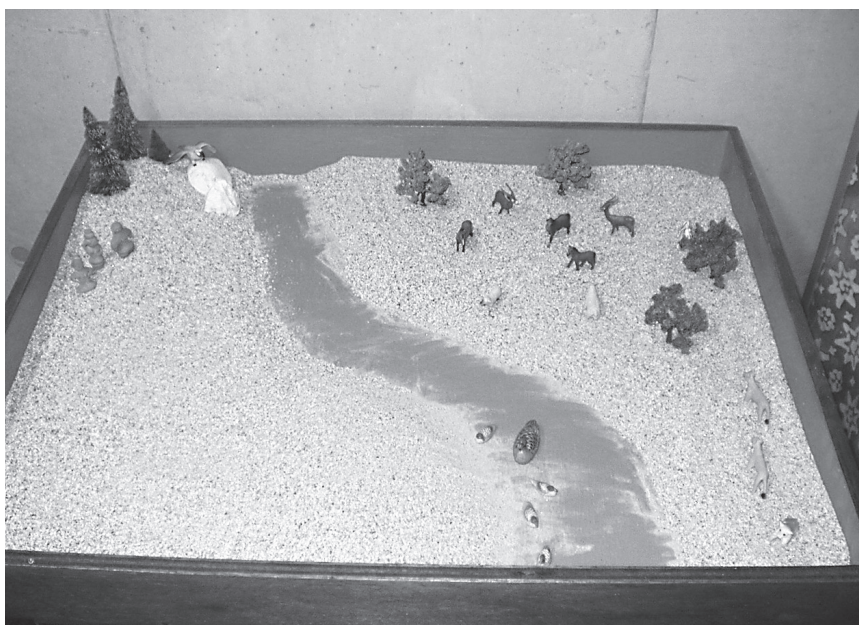


写真10 A氏第2回作品 砂箱左上に命という意味をもつ石。石の上に青い鳥。命でもあり山の番人でもある土偶・埴輪。蛇行した川に鴨の親子。砂箱右下にライオン。砂箱右上に馬、鹿、羊。

化した。「第1回では導き手(亀)が必要であったが、今回は亀が自己像となり、一人で外海へ泳ぎだそうとした(3調査、3内省)。この自己像の変化は、制作者が導き手の知恵や守りの力を自己に取入れることができたためと考えることもできよう」(楠本、2013a)。

第4回箱庭制作面接で、A氏は渦巻き状の水路を作り、カメが渦の中央に向かう構成を行った(写真12)。その構成について、第4回ふりかえり面接でA氏は以下のように語った。渦の中心に「向かってあの亀は生まれようとしているんだなっていうね。そんな感じがありますね。(中略)亀は生まれようとしているし、私は産みおとしてあげようとしている。<なるほど>産みおとしたい。(中略)新しい自分がそこにはいる」。渦の中心は多義的なイメージをもった領域であった。その一つのイメージとして、渦の中心に新しい自分がいるというイメージが付与されていた。

第5回箱庭制作面接で、A氏は、高くそびえる山からなる島を作った(写真13)。その島に、カメ(自己像)が上陸した。この島の構成について、A氏は、自発的説明過程で以下のように語った。島のふちをわりと最後の方丁寧に整えたんですけど、<そうだね>それはちょっと意識してやってて<ふうん>あのお、ま、ここは私の島なので他の人は登って来れない、ですね。(中略)というところでちょっと境界をくっきりさせて(A氏自発、5-12)。この島は、自分の島なので他の人は登って来れないこと、また、それを意識して、意識的に境界をくっきりさせたことが語られた。他者とのくっきりとした境界線をも

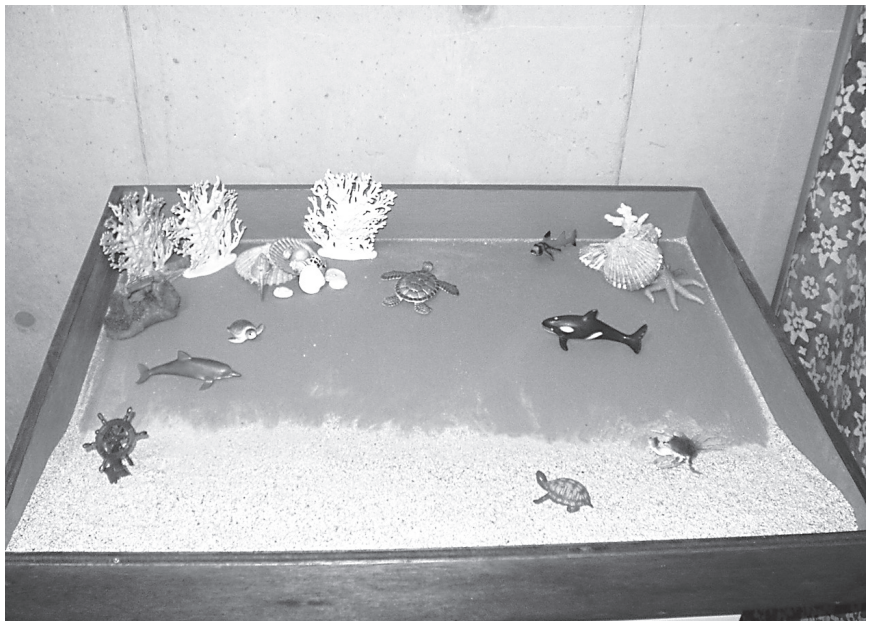


写真11 A氏第3回作品 沖を向く亀(自己像、砂箱中央上)とそれを見守る陸の亀。海にシャチ、カメ、イルカ。砂箱右上に半身を隠したタコ、ネコザメ。砂箱左上に夫婦岩、貝殻、海藻。その奥に隠された金色の貝。

つ自己の島に、海を旅してきたもう一つの自己像であるカメが浜辺から上陸した、と捉えることができる。

A氏は、第6回箱庭制作面接の作品について、調査的説明過程でこれまでは、くうん>そういう、私が、何かするっていうよりも、こういう世界にいる、っていうような感じを、作ってた気がしますね。(中略) 今日のはそういう意味では私がこうするっていう世界、ですね (A氏調査、6-13)、と語った。これまでの箱庭制作面接では、自分がこういう世界にいるという作品であったが、今回は、私がこうする世界だと語っている (写真14)。以前の作品との比較によって、作品内の自己の存在様式とその変化についての気づきが述べられている、と捉えられる。

ペンギンと海のエリアや家畜について、自発的説明過程で以下のように語られた。海にこういろいろいる生き物たちは、えーっと、この辺のちか、ち、サ、サンゴの手前は、ペンギンの食べ物です。くはあー、あそうなんや>うん、全部こう、う、食べ物というか漁をする、ペンギンが漁をするエリア<なるほど>というふうに思って作りました。<なるほど>うんで、こういうサメやいろんな、ちょっとおっかなそうなものいる海で、あの、餌を、とってるんだなーということですよね (A氏自発、6-9)。島の方、うーんとこの山のふもとにも、こう、家畜動物がいて、これもペンギンの餌笑 (A氏自発、6-12)。自己像であるペンギンは海で漁をし、家畜動物を飼育していた。

また、同回で、山の中央手前にインパラを置いた。そのインパラについて、



写真12 A氏第4回作品 砂箱中央に卵を抱えた鳥の巣。渦巻きの左上から中央に向けて進む亀 (自己像。砂箱右側の渦の中)。砂箱右上は、おっかないところ。その下にとぼけた河童。砂箱右下に水を飲む動物。砂箱左下に家、木々。砂箱左上に花、木々。

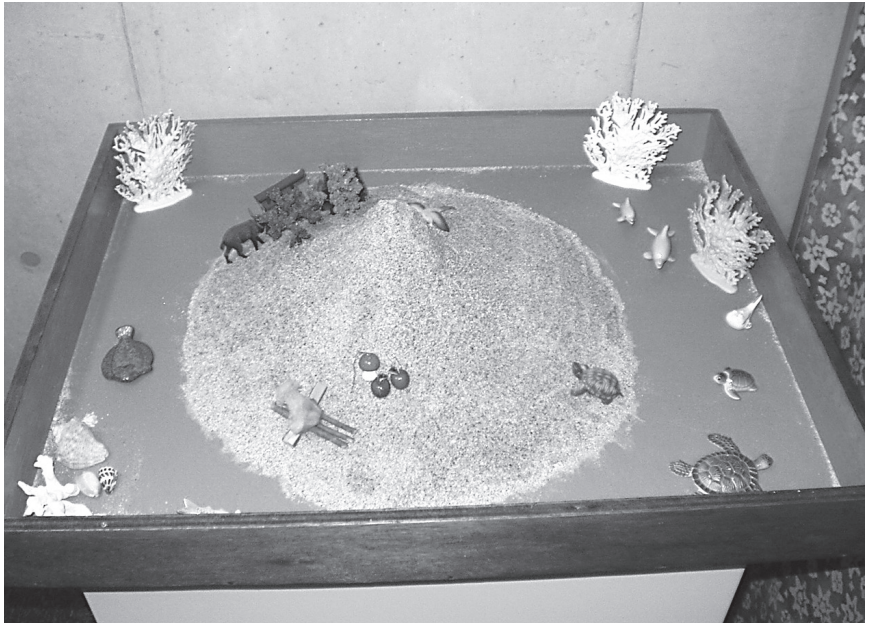


写真13 A氏第5回作品 円錐形の山からなる島（自己像）。右の浜辺に上陸する亀（自己像）。左上に神聖な森、鳥居、神聖な生き物である鹿。頂上に青い鳥。中央にリンゴと焚き火。海に仲間の亀、イルカ、貝殻、サンゴ、海藻、魚。

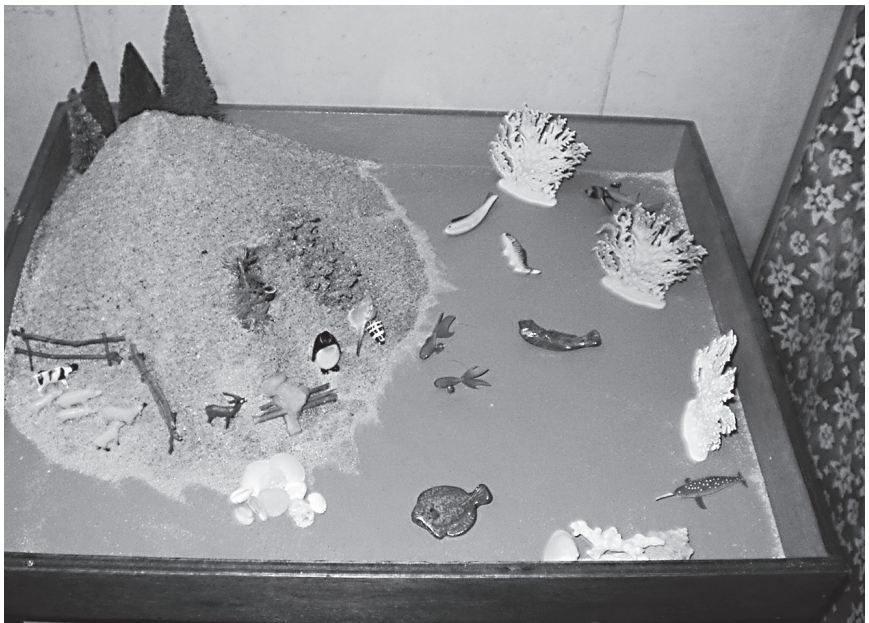


写真14 A氏第6回作品 私がこうするという世界。洞窟に住むペンギン（自己像、島の右下）とペンギンの相棒であるインバラ、焚き火。柵に囲まれた家畜や海の魚はペンギンのえさ。海にサメ、一角獣、サンゴ。

調査的説明過程で私のために何かしてくれる人なんて初登場。<初登場だよ
>ははは(笑)いい気分ですね (A氏調査、6-12)、と語った。この語りは、
作品に初めて自分のために何かをしてくれるミニチュアが現れ、喜びを実感し
たと理解できる。

第7回箱庭制作面接で、A氏は半島の構成を行った(写真15)。しかし、A
氏は、この作品に、愛着がもてなかった。そして、その理由について、いくつ
かの要因があったことに言及した。A氏の残念な思いが調査者に伝わってきた
ため、愛着が湧く作品に修正できないかと思い、調査的説明過程で調査者は再
構成を提案した(写真16)。愛着がもてなかった要因についてのA氏の主観的
体験を尊重しつつも、調査者は別の捉え方もできると考えた(楠本、2013a)。

別の捉え方も可能であろう。今回は面接の過渡期だったのではない
か。第6回は柵に囲まれた家畜がいる人間世界に近い世界だった。今
回初めて自己像に人のミニチュアが選ばれ、初めて人の世界を作ろう
としたが、表層的で愛着が湧かない作品となった(7-調査)。制作者
の残念な思いが調査者に伝わってきたため、愛着が湧く作品に修正で
きないかと、再構成を提案した。制作者はその発言が終わるのを待た
ずに、ぴったりこないミニチュアを片付け始めた。調査的説明過程の
再構成後、残ったミニチュアはほとんどが今までに使われたものであ
る。そして、今までの回のように人が登場しない世界となった(中略)。
また、ビデオ視聴時には「作品について『つまらない』という印象は
薄い」(7-内省)との内省報告からも表層的で愛着が湧かないという
感覚は、変化しうることがわかる。この二作品は、多面鏡で見る自己
像のように、制作者の意識の基盤と今後の展開を表現したものと見る
こともできよう。今回は人の世界をも取り込んだテーマに変化するた
めの過渡期であったと考えられる。

第8回箱庭制作面接で、A氏は砂箱中央に白い女性の人形を置いた(写真
17)。その後、その周りに、今までの箱庭制作面接で使用した動物を置いた。
それらの構成について調査的説明過程ですごく不思議なんですけど、これ作っ
ている最中、(義母のミニチュアの周りに)なじみの動物を置く時に、なん
かこれが母ではなくなって私になっていくなつていうような感覚が少しあつ
て、(中略)私にも母にも共通する何かがあるなつていう (中略) 女性って
いう命が持っている何か、意味のようなものを感じるというかね (A氏調査、
8-10)、と語った。A氏は、女性のミニチュアを意識的には義母と捉えており、
イメージの自律性や集約性が体験されていなかった。しかし、以前使ったなじ
みの動物を置くこと(連続性)により、自律性や集約性を体験できた。そして、
その体験によって、自分と母に共通する女性という命がもっている意味を感じ
ることができた、と捉えられる。

第9回箱庭制作面接の実施前に、A氏は、最近、実際に動いてみたい、感じ



写真15 A氏第7回作品 左側にけわしい崖のある半島。中央上に神聖な森と野生動物。男女の人形や家。中央に家畜動物。海には、イルカ、ネコザメ、亀、貝。半島手前にたくさんの花。半島右に家、ベンチ、船。

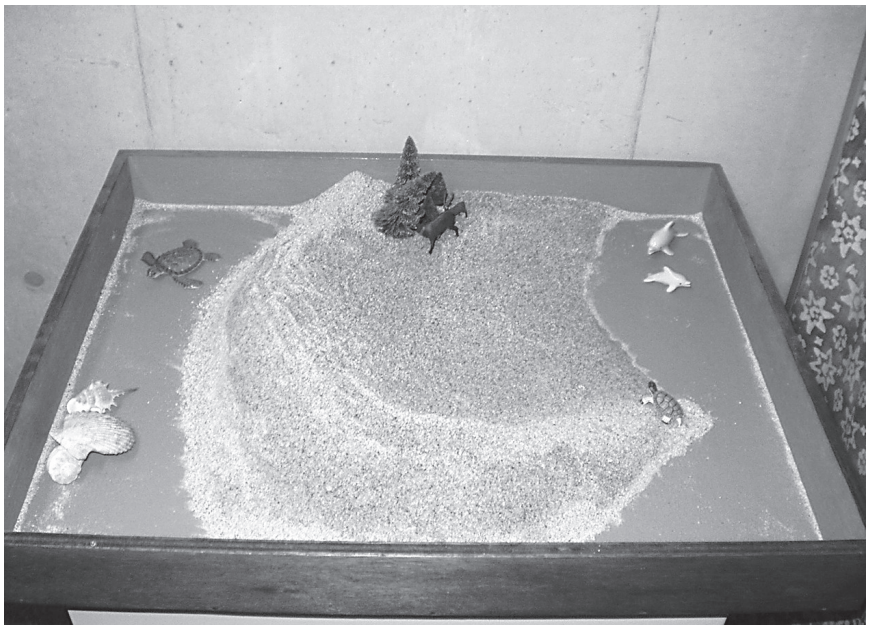


写真16 A氏第7回の調査的説明過程で、残したいミニチュアだけを残した作品 神聖な森と野生動物。海には、イルカ、亀、貝。浜辺に追加された亀。

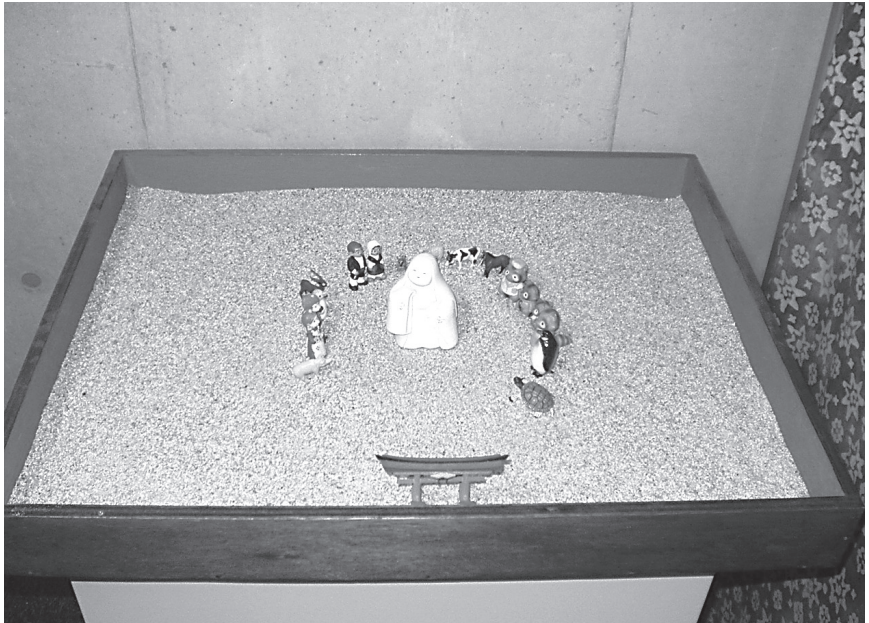


写真17 A氏第8回作品 入院中の義母（砂箱中央の白い女性）と周りを囲む親族、自分、看護師、動物達。これがあると、中央の人形達に命が入る感じがする鳥居。

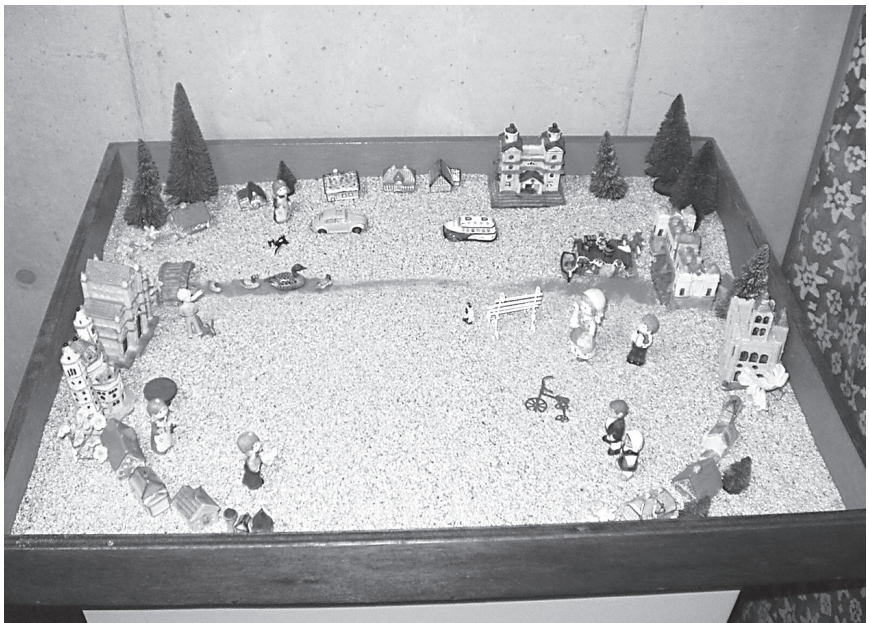


写真18 A氏第9回作品 円形の町の広場の風景。砂箱左側の映画館で映画を観ようとするキツネを連れた星の王子様（自己像）。砂箱右側に教会。川向こうには学校。川に2本の橋。広場には建物、人形、動物、乗り物、ベンチなど。

てみたい。その経験から自分が豊かになれるようなそんな希望(期待)がある(A氏内省、9-3、調査・意味)と思っていた。第9回箱庭制作面接で「ドアを開けたらそのまま、自分の欲求のままに現実世界で自由に行動を始めよう。足が軽くなっているというか、体が前に出ているというか、頭であれこれ考えなくて、まず体が行動している、そんな感じ(A氏内省、9-全体的感想、調査・意味)、と外に向かって動こうとする身体感覚を感じた(写真18)。

A氏は、第10回箱庭制作面接で、第9回の気づき、第9回と第10回の間の実生活での試み、第10回の構成の変化について、次のように語った(写真19)。「箱庭の中で私はずっとその、丸いモチーフを作るなど、ちょっとそれが、お互いに、こうすくみあってるみたいで嫌だなんていうのがあったんですけど、(A氏調査、10-前回について)それが1週間頭の中にあって。なんか、違う位置から見たいっていう気持ちを、すごく1週間意識してたんです、実は。(中略)(カーナビは)北を上を設定も出来ますよね。それに変えたんです、最近。(中略)カーナビ見る度に、すごいおもしろい、私今こんな方角に進んでたんだとか。そういうのがすごくその新鮮というか小気味いいというか、何か、私の心の中の世界とそういうことってシンクロするような気持ちがちょっとあって(A氏調査、10-前回と今回との間のこと)(中略)(前は)碁盤の目のように置けない、って言ってた私がいるんですけど、それはもう怖くなくなってる。碁盤の目のようにできそうだな、ってゆうのを感じながら、こういう配置にはしましたね(A氏調査、10-全体的感想)。A氏は、第9回の気づきを踏まえ、



写真19 A氏第10回作品 私のの中の奥まったところ。運河沿いの道。砂箱の左側に立って構成された、運河でパキーンと分かれた構図。砂箱手前に女性(自己像)、青い鳥、インバラ。奥に男女の人形、ベンチ。

現実で自分の進行方向を指し示す方法を変え、それが自分の心の世界とシンクロするような感覚をもった。その変化もあり、第10回で今までと違う位置（砂箱の左側）から、違う構成を試みることができた。

第10回箱庭制作面接でA氏は、自己像である女性がインパラと青い鳥とともに歩いている構成を行った。その構成について、調査的説明過程でA氏は海の方向なんですけどね、こっちに歩いて行ってる、ところです。（中略）ちょっと、これはすごくこ、山奥の、山奥というか平地かもしれないけど、まだまだ海まで遠い（中略）<まだ遙か先だけど、海に向かって歩いてるって感じ。そうか>はい。うん（A氏調査、10-8）（中略）ずっと歩いて行くのねっていう（A氏、10-全体的感想、調査）、と語った。面接終了後も、制作者が、同伴者とともに、自らの心の世界を歩んでいく実感をつかんだ最終回であった、と捉えられる。

同回の最後の箱庭制作過程17で、A氏は、柵にもたれるおじさんの人形を、もう一度持ってきて、置いてみたが、柵に戻した。その制作過程について、A氏は調査的説明過程でいろんな方向からその相手が見えるというか（中略）今は、この人がいて、そ、その人を正面からも見るし、後ろからも見るし、横からも上からも見る、そんなことを、し始めているなど思ってるんです。<なるほどね>それはとつてもその、私の中ではおっきな変化だと思ってますね（A氏調査、10-17）、と語った。また、同回の制作過程16でA氏は、砂箱奥に男女の人形を置いた。その制作過程について内省報告に自分ひとりでは生きられないというあたりまえのことを自覚しながらも、私の心の中に他人が入ってくることをこれまでは許していなかったし、それでいいと思っていたような気がする。多少の違和感があるけれども、それでもその違和感を抱えながら、その人たちと生きていこうと、今の私は思うようになったのか。（中略）一緒に生きてみても楽しいだけじゃなくていやなこともありそうだけれど、一緒に生きてみようと思っているようだ（A氏内省、10-16、制作・意味）、と記した。様々な視点から他者を見て、他者の多様性を知った上で、他者が自分の心の中に入ってくることを許し、違和感を抱えつつ共に生きようとする関係性の変化が生まれた、と理解できる。

2) 自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容の検討

A氏の第1回箱庭制作面接から第10回箱庭制作面接に亘って、箱庭制作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を、「自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容」の観点から検討する。

A氏第1回箱庭制作面接時点では、A氏は自分のベースはひっそりと静かなもので、活動的ではないと感じていた。この認識が箱庭制作面接開始時点でのA氏の自己認識であった。だが、以後、異なる面を発見していく。

A氏第2回箱庭制作面接でA氏は、砂箱右下隅にライオンを置いた。その箱庭制作過程について内省報告に、力強いもの、凶暴なものに憧れのような、親近感のような感覚を抱く。自分が生きていくためには、時に相手を喰らうこと

も必要、と記した。これは、攻撃性の積極的意味に気づいたと理解でき、第1回箱庭制作面接における自己認識に変化が生まれ、多様性の獲得が始まった、と捉えられる。

第3回箱庭制作面接でA氏は、自己開示ができていることを認識し、ありのままの自己の受け入れが進んだと思われた。また、回遊しているシャチ、イルカ、亀を見つめ、亀の頭の方を陸側から海の沖合の方向に変えた。この構成で、A氏は独自の道を歩もうとしている自分を確認した、と捉えられた。第1回箱庭制作面接ではイルカは自己像であり、カメは導き手だった。この回で、自己像がカメに変化し、一人で外海へ泳ぎだそうとした。この自己像の変化は、制作者が導き手の知恵や守りの力を自己に取り入れることができたため、と考えることもできた。このように自己受容が進むと同時に、独自の道を歩むという能動性を発揮し始めた、と理解できる。

第4回箱庭制作面接で、A氏は渦巻き状の水路を作り、カメが渦の中央に向かう構成を行った。渦の中心は、女性性・母性に関わるイメージやゴールなど多義的なイメージをもった領域であった。その一つとして、渦の中心に新しい自分がいるというA氏の主観的体験があった。自己像であるカメは、新たな誕生を体験した、と捉えられる。

第5回箱庭制作面接でA氏は、高くそびえる山からなる島を作った。その島に、カメ（自己像）が上陸した。この島は、自分の島なので他の人は登って来れないこと、また、それを意識して、意識的に境界をくっきりさせたことが語られた。自己と他者との間の境界である自我境界や自己イメージが明確になった、と理解できる。そのような島に、海を旅し、渦の中心で新たな誕生を体験したカメが到着し、上陸しつつあるように、調査者には感じられた。次回から自己像が変化することを考えあわせると、カメという自己像のゴールであり、次の展開へ向けての区切りの回であった、と捉えることもできるだろう。

第6回箱庭制作面接でA氏は、これまでの箱庭制作面接では自分がこういう世界にいるという作品であったが、今回は私がこうする世界だ、と語った。第6回箱庭制作面接で、自己像であるペンギンは海で漁をし、家畜を飼い、相棒であるインパラと鳥を探検した。食べるということへの積極的意味づけは、第2回箱庭制作面接のライオンからの発展と考えられる。しかし、それにとどまらず、家畜を飼い、相棒と探検するというように、自己像が世界により強く関与し、世界を管理していた。作品内の自己の存在様式に変化が見られた。前回では自己イメージが明確になったと捉えられたが、今回はさらに自我機能が強化され、周りの環境をコントロールしていく能動性が自己像に生まれた、と捉えることができよう。また、知恵をもち、協働できる相棒といえる存在が初めて現れ、他者との関係性の変容も生まれ始めた、と理解できる。

第7回箱庭制作面接で、A氏は初めて人がいる世界を作った。しかし、A氏は、この作品に愛着がもてなかった。A氏の残念な思いが調査者に伝わってき

たため、愛着が湧く作品に修正できないかと思い、調査的説明過程で調査者は再構成を提案した。再構成後、残ったミニチュアはほとんどが今までに使われたものであった。そして、今までの回の作品のように人が登場しない世界となった。この二作品は、多面鏡で見る自己像のように、A氏の意識の基盤と今後の展開を表現したものと見ることもできるだろう。今回は人の世界をも取り込んだテーマに変化するための過渡期であった、と考えられる。

第8回箱庭制作面接で、A氏は砂箱中央に白い女性の人形を置いた。その後、その周りに今までの箱庭制作面接で使用した動物を置くことで、中央の女性が自分でもあるように感じた。A氏は、女性のミニチュアを意識的には義母と捉えており、イメージの自律性や集約性が体験されていなかった。しかし、以前使ったなじみの動物を置くこと（連続性）により、自律性や集約性を体験できた。そして、その体験によって、自分と母に共通する女性という命がもっている意味を感じることができた、と捉えられた。A氏は自らの女性性を実感・確認できた、と捉えられる。

第9回箱庭制作面接で、最終的な作品として初めて街の風景が構成された。箱庭制作過程中にA氏は、最終回のイメージのような気持ちよさを感じた。それは、今までの箱庭制作面接では報告されたことのない身体感覚であり、身体が外の現実世界に向かい、自由に身体が行動しているというような能動的な身体感覚をこの回で初めて感じた、と捉えられた。Kalf (1966) は、箱庭療法における遊びの本質として、内から外への変化を指摘した (p.v)。A氏第9回箱庭制作面接では、その内から外への変化は、まずは内界が表現された街の風景の構成に顕れ、さらに構成を超えて面接外の外界にまで広がっていくような身体感覚が生まれた、と考えられた。これは、自己と他者を含めた外的世界との関係性が変容する萌芽となる身体感覚だ、と捉えることができる。そして、この変化は、第10回箱庭制作面接で報告された外界と自分の心のシンクロを生む基礎となった、と推測することができる。

A氏は、第10回箱庭制作面接で、第9回の気づき、第9回と第10回の間の現実生活での試み、第10回の構成の変化について語った。A氏は、第9回の気づきを踏まえ、現実で自分の進行方向を指し示す方法を変え、それが自分の心の世界とシンクロするような感覚をもった。その変化もあり、第10回で今までと違う位置（砂箱の左側）から、違う構成を試みることができた。このように日常生活と箱庭制作面接の両方の場において、行動レベルでの変化と内的な変化が生じていた。

また、同回でA氏は、自己像である女性がインパラと青い鳥とともに歩いている構成を行った。面接終了後も、箱庭制作者が同伴者とともに、自らの心の世界を歩いていく実感をつかんだ、と捉えられた。さらに、他者との関係性の変化も明瞭になった。A氏は、砂箱奥に男女の人形を置いた。続けて、柵にもたれるおじさんの人形を、もう一度持ってきて、置いてみたが、柵に戻すとい

う行為を行った。それらの行為についての語りや内省報告から、他者の多様性を知った上で、他者が自分の心の中に入ってくることを許し、共に生きようとする関係性の変容が生まれた、と理解できた。

以上、A氏の第1回箱庭制作面接から第10回箱庭制作面接に亘って、箱庭制作作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を、検討してきた。その検討を通して、箱庭制作面接が継続するの中で、多様な変化や成長が、連鎖的に生じていったことが確認された。

ここに、再度簡潔に要約する。自分のベースはひっそりと静かなもので、活動的ではないと感じていたA氏であったが、攻撃性の積極的意味に気づき、導き手の知恵や守りの力を自己に取入れることによって、多様性を獲得し、独自性を発揮し始めた。新たな自己の誕生を体験した後は、自我境界が明瞭になり、自己像が世界により強く関与し、世界を管理する能動性を獲得した。

多面鏡で見る自己像のように意識の基盤と今後の展開の表現と捉えられた二作品の後、初めて人の世界が作られた。その構成を通して、自らの女性性を実感・確認できた。身体が外の現実世界に向かい、自由に身体が行動しているというような能動的な身体感覚が生まれた。これは、自己と他者を含めた外的世界との関係性に変容が生じる萌芽だ、と捉えられた。

現実で自分の進行方向を指し示す方法を変え、それが自分の心の世界とシンクロするような体験を通して、日常生活と箱庭制作面接の両方の場において、行動レベルでの変化と内的な変化が生じた。面接終了後も、制作者が同伴者とともに、自らの心の世界を歩んでいく実感をつかんだ、と捉えられた。他者の多様性を知った上で、他者が自分の心の中に入ってくることを許し、共に生きようとする、他者との関係性の変容が生まれた、と理解できた。

IV. 結論

本稿は、単一事例質的研究によって、箱庭制作作者の主観的体験の変容や面接の展開、その個人的意味を検討することを目的とした。

B氏のデータを「宗教性を中心とした心や生き方の変容」の観点から検討した。この検討は(1)宗教性・信仰、(2)心の多層性、の観点からなされた。(1)宗教性・信仰では、B氏が本テーマに関して不思議さを体験したことに焦点が当てられ、その体験は、B氏の箱庭制作面接において、意識を超えたものが働いていたことの証左の一つと考えられた。(2)心の多層性では、第6回および第7回箱庭制作面接の特異性・非連続性に焦点が当てられた。この特性は、両作品にB氏の心の深層イメージが顕れているため、と考えられた。また、領域の拡大について、心の垂直方向への深化が水平方向の領域の拡大を生んだ、と考えられた。

A氏のデータを「自己の多様性と能動性の獲得、他者との関係性の変容」の観点から検討した。A氏の主観的体験の変容や面接の展開が見いだされた。箱

庭制作面接が継続するの中で、多様性や能動性の獲得、他者との関係性の変容が、連鎖的に生じていったことが確認された。

両氏の箱庭制作面接における主観的体験について、系列的理解を実施することによって、両氏への個別的理解を深めることができた。同時に、両氏の系列的理解によって、継続的な箱庭制作面接の連続性が、促進機能をもち、箱庭制作者の自己理解・自己実現・自己成長の促進に寄与することをも示すことができたと考える。

注：

- * 1 本研究法を表記するにあたって、楠本（2013a）の査読者からの提案を受け、単一事例質的研究と記載することとした。
- * 2 河合隼雄（1967）は、夢の機能の一つとして、展望的な夢を挙げ、それは、遠い将来へのプランのように意味をもって現れるもの、としている（p.154）。

謝辞：

原稿内容を確認し、公表を承諾くださった両調査参加者に深く感謝いたします。

付記：

本稿は、2013年度南山大学パッセ研究奨励金 I -A-2 による成果の一部である。

引用文献

- Kalff, D. : Sandspiel: Seine therapeutische Wirkung auf die Psyche. Zürich und Stuttgart: Rasher Verlag, 1966 (河合隼雄監修 大原貢・山中康裕訳: カルフ箱庭療法. 誠信書房. 1972)
- 河合隼雄：ユング心理学入門. 培風館. 1967
- 河合隼雄(編)：箱庭療法入門. 誠信書房. 1969
- 楠本和彦：箱庭制作者の自己実現を促進する諸要因間の相互作用(交流)に関する質的研究. 箱庭療法学研究, 25(1), 51-64. 2012
- 楠本和彦：箱庭制作者の主観的体験に関する単一事例の質的研究. 箱庭療法学研究, 25(3), 3-17. 2013a
- 楠本和彦：箱庭制作過程・説明過程に関する調査研究についての文献研究. 人間関係研究, 南山大学人間関係研究センター, 12, 54-70. 2013b